

討論

鈴木増：助手の振替のことで聞きたいのですが、現在の助手の人員は何名ですか。

長岡：5名で北白川3名、宇治が2名。

鈴木増：さらに2から3に減らして振り替えるのですか。

長岡：先ほどの学振の件も含めて、そういう方向に向かうこともあり得ます。

牧：大学院センターのことで、概算要求の折、文部省の方から間口が狭すぎるという言葉われたことをコメントしときます。

基研に期待するもの

柳田 勉（東北大理）

シンポジウムの講演を頼まれました時、この新しい基研に私が何を期待しているかをお話するつもりで上記の題名に致しました。例えば、国際的な研究所、充実したビジター制度等々と色々な夢は持っております。しかしそのようなバラ色な事をお話するよりも、私が基研について日頃から気にしている問題点について率直に述べる方が、すこしでもお役に立つのではないかと思います、題名を「基研の問題点」と変更させていただきます。

基研はこの春に理論研との合併により、30名近い所員を持つ研究所になりました。30名という数は大きな大学の物理学科の教官の数に匹敵し、しかも全員が理論物理学の研究者であることを考えると、非常に大きな研究所に生れ変わったこととなります。予算の規模も大きく拡大した訳ですから、今までになかったような側面を期待するのは当然だと思います。特に、国際的な研究所つまり外国からの優秀な研究者が常時複数名滞在し、国内からは多くの方が基研に出かけて行き、互いに物理の議論が出来るような研究所を望んでいる人達は少なくないと思います。このような研究所を作るためには、経済的バックグラウンドは当然必要ですが、基研自身が、目玉になるような魅力的な人材を確保する必要があります。このような基研の柱になるような方々に、長期的展望のもとに責任ある運営をある程度任せる方が良いのではないかと思います。もちろん、このためには任期制の見直しをやる必要があります。

この任期制の弊害はまた別の意味でも、現在の基研（北白川）にあらわれている気がしています。所員一人一人は非常に優秀な方々で、立派な実績も上げておられるのですが、何か基研（の素粒子論グループ）としてのまとまりとか所員間のつながりというものが感じられません。これが任期制のために、基研の運営に参加する余裕が所員の方にはないためだと言う

のは言い過ぎかもしれませんが、しかしあながち否定出来ないと思います。もし私のこの憶測がただしければ、これは任期制の持つ重大な問題点であります。私は、どのような組織でもそこで素晴らしい仕事が成された場合、それをサポートする体制が存在するべきだと思っています。つまり任期制を外す可能性を残す必要があります。

基研の規模が拡大した事も任期制を見直さざるを得なくなる要素になります。つまり、任期を5年とすると所員の数が約30名ですから毎年6名の方が研究所を去ることになります。毎年6名の理論物理の研究者を受け入れるスペースが大学にあるとは信じられません。もし無理をして任期制を固持すれば、優秀な人だけが研究所を出て行き、沈黙現象と言う最悪な事態をまねく心配があります。

現在の基研は、理論研との合併によりいままで果たせなかった夢を実現する可能性が出て来た、と同時に規模が大きくなったがゆえに今までの運営体制にある問題点が深刻化する危険性もはらんでいます。特に、所員の数がほぼ倍増したことや、ビジター制度の充実した国際的にも魅力ある研究所を目指すこと等を考えるならば、任期制は大きな障害になると思います。基研が新しく生まれ変わるにあたって、任期制の見直しを真剣に検討してもらいたいと言うのが、私がみなさん研究部員や運営委員の方々に期待するものであります。

討論

松田：湯川時代というのがありましたが、今のお話は湯川先生がいろいろと言われたりしたことを良くご理解になってそれを踏まえて湯川先生の考えでここが悪かったとか、何かそういうことがあるのでしょうか。湯川先生のアイデアと全然違うと思うんですね。まず基研に酸素かなんかあってそれを吸いにきてまた地方へ行って元気だしてまた帰ってくる。そんなんじゃないかと、基研というのは若手も含めて全部の物理の研究者がそのあり方を考える。だから、単にそこにすごくいいものがあるというのではないと思う。湯川先生が言われたのは、基研の活動は全国に広がっているんだから全国を良くして基研も良くすると、だから公衆便所であってはいけないと言うことは前から言われてたこと。数ある共同利用研究所の中で基研が果たした役割をもうちょっと検討して、何処が良かったかというのがあってそれで議論があったほうがいいんじゃないかと思う。

川村：過去の検討も必要だけどそういうことを忘れることも大事ではないでしょうか。

川崎：基研で長期的研究が育つ必要はあるのか。少なくとも物性は人材について現在恥ずかしくない方々ばかりおられる。

小貫：所員に要求することばかりでなく、外の大学の方が努力することも必要だと思う。
基研は人数が少ないので限界がある。

牟田：地方の大学では大学院があることが潤滑油になっている。院生を通じて研究面での相互の行き来、交流が育っている。大学院を置くかどうかは色々議論がある。

松田：湯川先生は子飼いの学生を作らない、流動することが必要と言われた。特に、マスター生を取るのは問題。弱い大学に来させなくなる。

柳田：理想は色々解りますが、現実をながめて問題があるということ言ってるわけです。ソビエトもペレストロイカをやっているわけで、古い体質からの脱却が必要ではないか。

研究分野形成・発展の場としての共同利用研究所

池田 清美（新潟大理）

I はじめに

これまで、基研を始めとし共同利用研を大いに活用してきたのであるが、どの様に活用してきたかを振り返り、共同利用研としてのの大事な機能である共同利用の持っている役割について考え、基研と理論研が合併したこれからもこれまで果してきた重要な役割を、新たな段階に於て創造的に発展させていただきたいと考えております。

II 核理論の分野の研究活動と基研

原子核理論の分野の研究活動と基研との結び付きを振り返って見るに良い資料として、Progress of Theoretical Physics の Supplement が適当と考え、それに準拠して話すことにします。

II-1) 初期のころ、1960年代迄

始めに現れたのは、“Nuclear Moments and Configuration Mixing ; 野矢・有馬・堀江、No.8 (1958) 33 ” ; メイヤー・イェンセンの殻構造の発見が1949年ですから非常に早い仕事であります。日本では原子・分子の山内さんの仕事があり、その伝統が基になって出来た仕事と思っております。核の偏極についての仕事がありますが、コペンハーゲンの集団運動の展開で核偏極の考えは一般的となりました。朝永、野上らの集団運動の微視